

令和4年度入学（学校推薦型選抜、社会人選抜）試験問題の出典

看護学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	－	佐藤 真一	認知症の人の心の中はど うなっているのか？	光文社出版, 2018年, pp.101-110より, 一部改変	光文社

令和4年度 学校推薦型選抜
社会人選抜

看護学部

小 論 文 (90分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、3ページあります。なお、下書き用紙が1枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず**黒鉛筆**（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

問題訂正・補足説明

○問題訂正・補足内容

教科名 小論文

頁・問題番号・行 問1

○ 板書内容

☑ 問題訂正

誤) 下線部 (1) ~ (5) を漢字で表しなさい。

正) 下線部 (3) ~ (5) を漢字で表しなさい。

☑ 補足説明

・ 問1 (1) (2) は解答しなくて良い。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(100点)

あなたは、「テレノイド」をご存じでしょうか？

テレノイドは、大阪大学と ART (国際電気通信基礎技術研究所) が開発した、⁽¹⁾えんかく操作型のコミュニケーション・アンドロイドです。開発の中心である石黒浩教授は、マツコ・デラックスや桂米朝のアンドロイドでも有名な、ロボット研究者です。

ただ、テレノイドは、これら個人を模したアンドロイドと異なり、極限まで個性を削ぎ落とした、シンプルな外見をしています。何に見えるかと尋ねれば、「幼い子ども」と答える人が多いのですが、見た人のほとんどが「不気味だ」と言います (写真 1)。



写真 1

あなたは、いかがですか？やはり不気味だと思われたのではないのでしょうか。

ところが、テレノイドは、認知症の人にはとても受けがいいのです。オペレーターが遠隔操作して、テレノイドを通して話しかけると、とても楽しそうに会話をするのです。

そこで、なぜそのようなことが起こるのか、認知症の人とテレノイドの会話にはどのような特徴があるのかなどを、私の研究室が協力して調べることになりました。

(中 略)

私たちの研究では、前半は学生だけ、後半は学生と傾聴ボランティアが、対面とテレノイド経由で認知症の人と会話をしました。なぜ後半は傾聴ボランティアに参加してもらったかという、会話の訓練を受けた人とそうでない人との違いを見るためです。

結果から言うと、学生の場合は、初めのうちは対面よりもテレノイドを介した方が、会話が弾みました。そして回を重ねて、認知症の人の会話のゆとくちようがつかめてくると、対面でも会話が弾むようになりました。

これに対して傾聴ボランティアは、対面の方がテレノイド経由よりも、質、量ともにいい会話ができました。特に、会話をしている間の認知症の人の様子は、学生が話し相手のときはテレノイド経由の方が明るく、傾聴ボランティアが相手のときは対面の方が明るかったのです。いったいなぜ、このような結果になったのでしょうか？

学生は、相手の話を聞く訓練を受けていません。そのため、認知症の人と対面で話すと、どうしても意識が自分に向いてしまいます。自分は何をしゃべればいいのか、相手に何を質問すればいい

んだらう、という具合です。

ところが、テレノイドを介した会話では、学生は「認知症の人がテレノイドを何だと思っているか」を考えて話をします。女の子だと思っているのか、男の子だと思っているのか。若い頃の自分に戻って、まだ幼い自分の子だと思っているのか、あるいは孫だと思っているのか、それとも近所の子か。

テレノイドを介することで、自然に認知症の人の心の世界に入り込み、会話が弾んだのです。自分の言動を客観的に捉える心の働きを「メタ認知」と言いますが、自分中心だったメタ認知が、相手中心のメタ認知に切り替わった、と言ってもいいでしょう。

そして、テレノイドで会話のコツをつかんでからは、対面でも会話がスムーズにできるようになっていきました。

それに対して、傾聴ボランティアは、相手の話を聞く訓練を受けていますから、初めから対面で、相手の世界を中心にした会話をすることができます。むしろテレノイドを介した方が、会話をしにくいと感じたようです。

これらの結果からわかるのは、認知症の人との会話では、相手の心の世界を理解し、そこに入り込むことが大事だということです。ただ、この研究は長く続けることが難しい、ということもわかりました。学生たちが飽きてしまうのです。

認知症の人は、テレノイドや学生と会話したことをじきに忘れます。次に会話するときは、以前会ったことも、会話の内容も忘れていきます。ですから、その人がどのような会話を好むかがわかった学生や傾聴ボランティアは、それ以降は毎回、同じ会話をするようになります。探りながら会話をする労力を節約するわけですが、そのことが自分に跳ね返ってきます。傾聴ボランティアはまだその状況に耐えられますが、学生は耐えられません。だんだん⁽³⁾いよ^くが低下して、研究自体を続けることが限界になってしまいました。

この事実は、探りながら会話をする労力を惜しんではいけないことを物語っています。「どうせ覚えていないのだから、いつも同じ話でいい」という発想は、私たち自身をダメにするのです。

認知症の人が、じつはとてもよく話することに、私たちは驚いたわけですが、もう1つ驚くことがありました。Hさんがテレノイドに向かって、絵本の読み聞かせを、しかも流暢^{りゅうちょう}に歌うような節をつけてしてくれたのです。

Hさんは中等度の認知症であり、絵本の読み聞かせができるとは、周囲の誰も思っていませんでした。そのような機会がなかったからといえばそれまでですが、認知症になると、どうしても障がいのある人として扱われます。⁽⁴⁾せんざ^いてきな能力はまだたくさんあるのに、できないことにばかり注目してしまい、能力に気づかないのです。

そのような私たちの思い込みもまた、認知症の人の生活の障がいや⁽⁵⁾こどくの一因ではないでしょうか。

日常会話が多くなれば、私たちの思い込みも解け、認知症の人の持つ力に気づくことができるようになるはずで

(佐藤眞一『認知症の人の心の中はどうなっているのか?』, 光文社, 2018年, pp.101-110より,
一部改変)

問1 下線部(1)~(5)を漢字で表しなさい。

問2 二重下線部の理由を100字以内で述べなさい。

問3 認知症の人との会話において、あなたが重要だと考えることを作者の考えを踏まえ600字以内
で述べなさい。